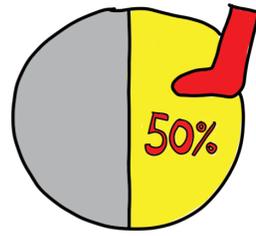


くつしたは職人さんたちの熟練の技でつくられてる！

くつしたは職人さんたちの熟練の技でつくられてる！



そして現在、日本の三大くつ下産地のひとつです。

東京都、奈良県、そして兵庫県が全国の三大くつ下産地と言われています。兵庫県の中でも加古川市周辺は、全国有数の取扱高を誇っています。兵庫県で生産されるくつ下の約半分が、加古川市周辺の生まれです。



昭和24年、日本一のくつ下産地に！

自動編み機が普及し、工場も組織化されていました。神戸港に近い立地をいかして、世界各国へ輸出。くつ下は、日本を代表する輸出品になっていきます。やがて、戦争。そして、戦後の復興期。苦難を乗り越え、加古川市周辺は日本一のくつ下産地になりました。



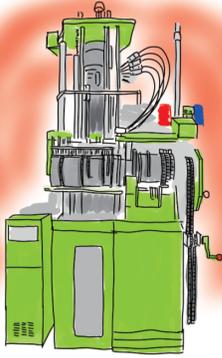
大正になり、どんどん機械化が進みました。

はじめのころは農家の副業でした。大正初期には半自動くつ下編み機、大正13年には自動編み機が輸入され、どんどん技術革新が進み、生産も拡大していききました。



明治 そのはじめは、明治19年のこと。

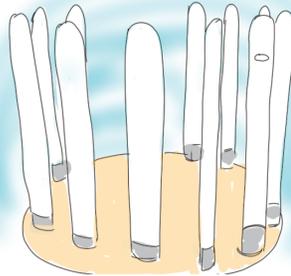
兵庫県下でのくつ下製造業の発祥は、「明治19年に印南郡志方町(現、加古川市志方町)の住民である稲岡啓吉さんが、上海から手廻しのくつ下編み機を持ち帰り、製造をはじめたことによる」と、されています。



くつしたは、他の繊維と生地のでき方が全く違います。円筒状に編み立てられて、最初からくつしたの形で生地が作られます。



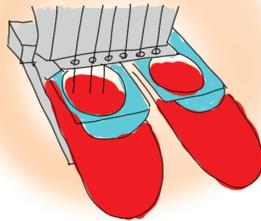
編み立てられたくつしたは1枚ずつ、つま先部分を縫い合わせる作業にはいります。この工程はほとんどが手作業。履き心地に関係する重要な部分です。



つま先やかかとなどの検品を行います。このとき使う板は、見やすいような白色や電光板を使うこともあります。



検品は1枚ずつ、人の手と目で確認していきます。店頭にならぶハンガーなどに加工していきます。



ロゴマークやキャラクターなどを刺繍ミシンで入れていきます。



アルミ製の足型に1足ずつ靴下をはめて蒸気でセットします。生地の原材料や風合いによって蒸気の圧力や乾燥時間が調整されます。この調整によって洗濯後の収縮を少なくしたり、形を整えたりができます。



素足のような履き心地

